

社会教育主事講習における現地演習の取組と成果

—愛媛大学での実践事例より—

(次世代人材育成拠点 教職総合センター) 高橋 平徳
(教育臨床講座) 藤原 一弘
(教育臨床講座) 班 婷
(教育臨床講座) 梅田 崇広
(教育実践高度化専攻・教職総合センター) 白松 賢
(教育実践高度化専攻) 中尾 茂樹
(教育臨床講座) 山田 誠

A Study on the Activities and Outcomes of Fieldwork in the Qualification Course for the Social Education Director at Ehime University.

Yoshinori TAKAHASHI, Kazuhiro FUJIWARA, Ting BAN, Takahiro UMEDA, Satoshi SHIRAMATSU, Shigeki NAKAO, and Makoto YAMADA

(2024年9月2日受付、2024年11月27日受理)

抄録：本稿では、本学での社会教育主事講習における現地演習の取組とその成果を報告する。社会教育人材の確保を図る上で、受講希望者の多様なニーズに対応できる社会教育主事講習の機会の提供が重要視されているなか、本学では、オンラインとリアルとのベストミックスを目指し、一部オンデマンド配信での講義も含め、受講者がグループ別に愛媛県下3地域（東予、中予、南予地域）に分かれ、社会教育が展開されている現場に赴き、2泊3日の合宿研修として実施する「社会教育現地演習」を実施している。この現地演習の取組を紹介するとともに、現地演習の成果を検討すべく、11項目の事前事後アンケート調査を実施し分析した。その結果、全項目において、現地演習前後の得点に $p < 0.5$ の有意差が認められ、平均値が大きく増加していた。また、効果量 (r) の値も全項目 0.60 以上で効果量大を示していた。そして、自由記述及びインタビューからも大きな成果が得られていることが裏付けられた。社会教育のこれからを担う社会教育人材を養成していく上で、現地でのフィールドワーク（講義、演習、見学、聴き取り、参加体験、集団討議、記録、リフレクション等）を含む現地演習は、非常に効果的な取組であると指摘できる。

1. 本稿の目的と背景

1.1 社会教育主事と社会教育主事講習

本稿の目的は、本学での社会教育主事講習における現地演習の取組とその成果を報告することである。

社会教育主事とは、「社会教育法に基づき都道府県・市町村の教育委員会に置くこととされている専門的教育職員」である。その職務として「地域の社会教育事業の企画・実施及び専門的な助言と指導を通じ、地域住民

の学習活動の支援を行う。そのほか、地域の学習課題やニーズの把握・分析、地域の社会教育計画の立案やそれに基づいた学習プログラムの立案、地域人材の育成、地域人材の把握、学校教育と社会教育との連携の推進、相談など、その職務は多岐にわたっている¹と説明されている。

また、今日の社会教育の裾野の拡大に伴い、「地域全体の学びのオーガナイザー」として、「学校教育(行政)をはじめ、首長部局が担う環境、福祉、防災、農山漁村振興、まちづくり等と社会教育(行政)をつなぐこと等により、社会教育行政及び実践の取組全体を牽引し、地域全体の社会教育進行の中核を担う」²役割が期待されている。

こうした社会教育主事として教育委員会で発令されるための資格を得るには、大学や短大の社会教育主事養成課程において社会教育主事養成に関わる社会教育の単位を全て習得するか、あるいは社会教育主事講習を受講し修了するかの方法がある。またどちらの方法でも社会教育士の称号が付与される。

社会教育主事講習とは、新たに社会教育主事となりうる資格を得るために、「生涯学習概論」(2単位)、「生涯学習支援論」(2単位)、「社会教育経営論」(2単位)、「社会教育演習」(2単位)の4科目を受講する講習である。

社会教育現場での経験がある者を主たる受講対象者と想定してカリキュラムが組まれているため、大学・短大等を卒業している、教員免許を所有している、社会教育関係の職に2年以上従事している、学校に4年以上勤務している等のうち、いずれかに該当することが受講要件とされている³。

1.2 社会教育主事講習の様々な形態

社会教育人材の確保を図る上で、受講希望者の多様なニーズに対応できる社会教育主事講習の機会の提供が重要視されており、「受講形態については、利便性の高さなどのオンライン・オンデマンドの良さや臨場感の高さなどの対面の良さなど、それぞれのメリットを活かすことに加え、科目の特性や社会教育主事講習の具体的な実施手法も踏まえて適切に選択されることが重要」⁴と指摘されている。

特色ある受講形態の例として、「全講義をオンライン化、夜間や休日にライブ配信で講義を実施、一部科目をオンデマンド化、オンラインとリアルベストミックス(オンデマンド化等による負担軽減を踏まえたフィールドワークや対面での講義の実施)」⁵が挙げられているように多様な受講形式がそれぞれの講習実施機関で取られていることがわかる。

本学では、4年前は1講義を除き対面で行っていたが、講義の目的や内容に即して、運営小委員会で慎重に検討を重ね、「オンラインとリアルベストミックス」を目指し、今年度の実施計画を作成して実施した。

1.3 本学での社会教育主事講習

香川大学、鳴門教育大学、高知大学と四国で持ち回り開講をしているため、本学では、4年に一度、愛媛県教育委員会、東予教育事務所、中予教育事務所、南予教育事務所、各市町教育委員会と連携・協働し社会教育主事講習を開講している。

今年度は、受講者の利便性も踏まえ7月16日から28日をオンデマンド配信での講義期間とし、7月29日から対面講義を開始して、全日程で7月16日から8月23日の講習を実施した(8月10日から18日は休講)。

その中で、8月7日から9日までの2泊3日、「社会教育現地演習」を行った。「社会教育現地演習」は、講習科目「社会教育演習」の一環であり、本学では、「社会教育演習」を、「社会教育現地演習」と「社会教育グループ別演習」とで構成している。

社会教育主事講習を開講する大学や機関は様々にあり、全講義をオンライン化するなど社会教育現場での活動を行わない大学や機関もあるが、本学ではこの現地演習を、社会教育人材を育成する上で重要な「リアル」な活動として位置付け実施している。

本報告ではこの現地演習の取組を紹介し、その成果について考察を行う。

2. 現地演習の取組

2.1 現地演習の概要と目的

現地演習は、全25名の受講者がグループ別に愛媛県下3地域(東予地域:西条市・今治市8名、中予地域:砥部町・松山市・松前町・伊予市9名、南予地域:西

予市・大洲市・宇和島市・愛南町8名、**図1**)に分かれて、社会教育が展開されている現場に赴き、2泊3日の寝食を共にする合宿研修として実施される。

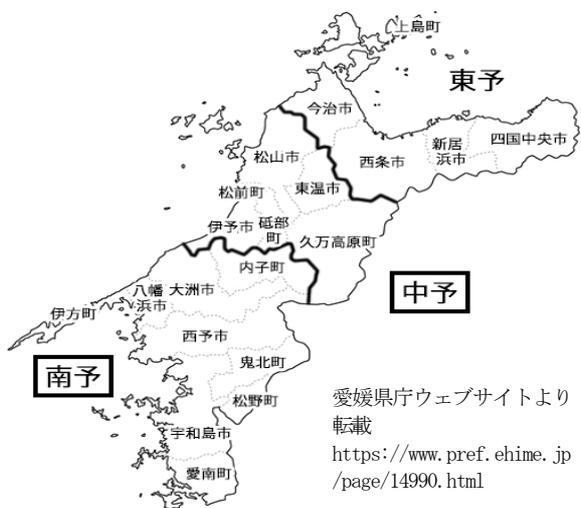


図1 愛媛県の3地域

現地演習の目的は、現地演習を通して、「様々な地域課題に対する「学び」を通じた解決の取組と社会教育主事が果たす役割を理解するとともに、受講者が現地の方々と課題を共有しつつ、各自の問題意識を深め、多様な主体と連携・協働を図りながら、自ら課題の解決に取り組むことができるよう総合的かつ実践的な力を養うこと」⁶である。

2.2 現地演習の内容

現地演習では、現地でのフィールドワークに取り組む。フィールドワークには、現地での講義 (**写真1**)、演習、見学 (**写真2**)、聴き取り、参加体験 (**写真3**)、集団討議、記録、リフレクション (**写真4**) 等を含んでいる。

フィールドワークの内容は、現地演習の目的を達成できるよう、各地域の教育事務所担当者と担当大学教員間で検討・選定し、先方との相談・調整を行いながら決定している。

現地演習には各グループに担当大学教員2名と各地域の教育事務所担当者が同行し、講義者・施設・活動の紹介や、質問やリフレクションでの促しなど、ファシリテーターとして受講者の学びを支援している。

現地演習のスケジュールの詳細は以下表の通りであ

る(東予地域(表1)、中予地域(表2)、南予地域(表3))。

2.3 現地演習と事前事後のグループ別演習

現地演習は、ただその日程で現地に行くのではなく、それまでに受講してきた「生涯学習概論」「生涯学習支援論」「社会教育経営論」それぞれの講義から得られた専門的・理論的知見、また、各地域の活動についての「社会教育グループ別演習」での事前学習を踏まえて行われる。

現地演習後には現地演習でのフィールドワークの内容をさらにグループ別演習で検討を重ね、社会教育主事講習最終日のグループ別演習発表会で発表し研究集録にまとめる。

現地演習の事前学習や事後のグループ別演習においても現地演習と同様に担当大学教員がグループでの活動に参加しファシリテートしている。

写真1 現地での講義を受ける受講生



写真2 地域博物館の見学



写真 3 水引細工製作への参加体験



写真 4 毎日のリフレクションの様子



表 1 東予地域現地演習スケジュール

8月7日（水）

時刻	内容
～8:00	愛媛大学教育学部4号館前集合
～9:45	西条市立図書館集合、受付、開講式
10:00	11:00 【講義・見学】生涯学習の拠点としての図書館の役割：西条市図書館の取組
11:00	11:15 愛媛民藝館へ移動
11:15	12:30 【講義・見学】地域資源の発見と産業、そして人づくり：愛媛民藝館、西条市郷土博物館、伊藤五百亀記念館の取組
12:30	14:00 移動・昼食
14:00	16:00 【講義】住民によるまちづくり支援：一般社団法人リズカーレの取組
16:00	18:00 宿泊地：石鎧ふれあいの里へ移動荷物整理、休憩
18:00	19:00 夕食（弁当）・交流
19:00	21:00 【講義】多様な主体をつなぎ連携して行う地域づくり：西条市小松地域「立志隊」の取組
21:00	22:00 リフレクション：1日のふりかえり
22:00～	入浴、就寝

8月8日（木）

時刻	時刻	内容
6:00	8:30	起床・準備、朝食
8:30	9:00	西条市立小松中学校へ移動
9:00	14:00	【見学・体験】小松地域未来塾：地域住民・大学生による中学生の学習支援、高校生の中学生に向けた水引細工教室・チーズケーキ作り教室、昼食
14:00	15:00	【講義・見学】近藤篤山について、旧邸見学
15:00	17:00	【講義】多様な主体が連携して子どもを育てる地域未来塾と西条市小松公民館の取組
17:00	18:00	石鎧ふれあいの里へ移動、休憩
18:00	19:30	リフレクション：1日のふりかえり
19:30	21:30	夕食（BBQ）・団らん
21:30～		入浴、就寝

8月9日（金）

時刻	時刻	内容
6:00	8:00	起床、退所準備、朝食
8:00	10:00	今治市村上海賊ミュージアムへの移動・休憩
10:00	12:00	【講義・見学】博物館の役割・文化財の活用：村上海賊ミュージアムの取組
12:00	13:00	閉講式、昼食、解散

表 2 中予地域現地演習スケジュール

8月7日 (水)

時刻	内容
12:30	13:00 砥部町山村留学センターに集合、開講式
13:00	14:30 【講義・見学】 特色のある施設運営の在り方：砥部町山村留学センターの取組
14:30	えひめこどもの城へ移動
15:30	17:30 【講義・見学】 集客するための工夫の在り方：えひめこどもの城の取組、ジップライン体験
17:30	19:30 宿泊地：えひめ青少年ふれあいセンターへ移動、入所、オリエンテーション、夕食
19:30	20:30 リフレクション：1日のふりかえり
20:30	入浴、就寝

8月8日 (木)

時刻	内容
6:30	8:30 起床・朝のつどい・清掃・朝食
8:40	坂村真民記念館へ移動
9:30	11:30 【講義・見学】 坂村真民 氏の生き方から学ぶ、坂村真民記念館の見学
11:30	松前総合文化センターへ移動、昼食は各自
13:30	16:30 【講義・見学】 文化財の有効活用の在り方：松前町教育委員会の取組
17:00	えひめ青少年ふれあいセンターへ移動
19:30	20:30 リフレクション：1日のふりかえり
20:30	入浴、就寝

8月9日 (金)

時刻	内容
6:30	8:15 起床、朝の集い、清掃、朝食、退所点検、退所
8:15	私設図書館ビブリアAAへ移動
9:00	10:30 【講義・見学】 本を通じたつながりづくり：いよ本プロジェクトの取組、私設図書館ビブリアAA見学
10:30	IYO夢みらい館へ移動
11:00	12:00 【講義・見学】 求められる社会教育施設とは：IYO夢みらい館の取組
12:00	喫茶ポバイへ移動・昼食
13:30	16:30 【講義】 地域おこし協力隊、地域教育プロデューサーとしての地域の拠点づくり：伊予市移住サポートセンターの取組、海に恋する泊まれる喫茶店ポバイの取組、伊予市地域教育プロデューサーの取組
16:30	17:30 リフレクション：1日のふりかえり
17:30	閉講式、解散

表 3 南予地域現地演習スケジュール

8月7日 (水)

時刻	内容
8:30	9:00 乗り合わせ集合
10:00	10:20 宇和文化会館集合集合・受付、開講式
10:30	12:00 【講義・見学】 地域文化の継承と課題：末光家住宅の見学
12:00	13:20 昼食・休憩
13:30	14:20 【講義】 西予市のまちづくり体制：西予市の新たな地域づくり構想
14:30	14:45 移動 (田之筋地域づくり活動センター)
14:45	15:35 【講義・見学】 西予市のまちづくり体制：田之筋地域づくり活動センターでの活動
15:45	16:15 移動 (野村地域づくり活動センター)
16:15	17:05 【講義・見学】 西予市のまちづくり体制：野村地区の地域活動について
17:15	17:45 国立大洲青少年交流の家へ移動・入所
17:45	19:00 オリエンテーション・夕食
19:00	19:50 【演習】 人間関係促進 (レクリエーション)の技法
20:00	21:30 リフレクション：1日のふりかえり
21:30	入浴・就寝

8月8日 (木)

時刻	内容
6:30	起床、朝のつどい、朝食・清掃等
8:45	9:35 【講義】 青少年教育事業・施設の利活用：国立大洲青少年交流の家の取組
9:50	10:00 退所、大洲市平野コミュニティセンターへ移動
10:00	11:45 【講義・見学】 地域学校協働活動の実際：平野小・中学校地域学校協働活動の取組
11:55	12:30 宇和島市立中央公民館へ移動
12:30	13:20 昼食・休憩
13:30	15:00 【講義】 地域発信の防災教育と子ども食堂：NPO法人U. grandma Japanの取組
15:10	16:40 【講義】 公民館での青少年育成活動：宇和島市立中央公民館の取組
16:45	18:30 ゆらり内海へ移動、夕食
18:30	19:10 山出慰いの里温泉へ移動、チェックイン
19:20	20:00 入浴・休憩
20:00	22:00 リフレクション：1日のふりかえり
22:30	就寝

8月9日 (金)

時刻	内容
6:30	7:30 起床、退所
7:30	8:35 ジョイフル愛媛御荘店へ移動、朝食
8:35	9:00 内海中学校へ移動
9:00	13:00 【講義・演習】 水辺の活動 (リスクマネジメント) について 【自然体験活動】 シーカヤック体験
13:00	閉講式、解散

3. 現地演習の成果と考察

本節では現地演習の成果について、受講生に対する現地演習事前事後アンケート、アンケートへの自由記述、及びインタビューから検討する。

3.1 成果の検討方法

3.1.1 調査対象と方法

現地演習事前事後アンケートの調査対象は、2泊3日の現地演習に参加する受講者25名である。

事前アンケートは8月6日のグループ別演習開始の際に、「研究協力依頼文書・倫理的配慮説明文書」を配布し説明を行い回答を得た。また、現地演習を終えて10日後でお盆の休講期間が明けた8月19日に事後アンケートを行った。事前アンケートと同様に文書を対象者に配布・説明し回答を得た。事前事後アンケートともに「研究協力依頼文書・倫理的配慮説明文書」にMicrosoft FormsにリンクするQRコードを掲載し、オンラインでの回答を得た。

また、2024年8月26日にZoomを活用して2名に対する1時間程度のオンライングループインタビューを行った。

3.1.2 調査項目

現地演習事前事後アンケートの調査項目は、社会教育現地演習の目的をもとに研究者間で検討し作成した。表4の通りの11項目である。とてもそう思う5、そう思う4、どちらともいえない3、そう思わない2、全くそう思わない1の5段階評価で尋ねた。

事後アンケートには、「2泊3日の現地演習に参加して、もっとも学びになったこと」の自由記述欄を設けた。

グループインタビューの内容は、「現地演習を通して学びになっていると思えること」や、「そう思える具体的なエピソード」等である。

3.1.3 分析方法

まず現地演習事前事後アンケート各項目の現地演習前と現地演習後の平均点及び標準偏差を算出する。また現地演習前後の得点の有意水準を検討するため対応のあるt検定を行う。そして、各項目の現地演習前後の効果量(r)を算出する。

自由記述及びインタビューでの逐語録といった質的データは、回答の意味内容を読み取り、事前事後アンケートの各質問項目に沿って分類し、代表的なものを抜粋していく。

以上の量的、質的データの検討によって現地演習の成果を明らかにしていく。

3.1.4 倫理的配慮

本調査では、対象者の研究への参加は任意で、社会教育主事講習での他科目も含めた単位認定及び成績評価とは一切関係がないこと、調査への不参加による不利益がないこと、調査参加への中止を研究者に対していつでも通告できること、データの管理を厳重に行うこと、学会や論文で研究成果を公表すること等を口頭と「研究協力依頼文書・倫理的配慮説明文書」で説明し、研究協力への同意を得て実施している。

オンライングループインタビューについては以上に加え、協力者に許可を得て録音し、逐語録を作成している。

3.2 結果

3.2.1 分析対象と項目得点の統計量

現地演習前後両方のアンケート調査を完了した対象者は23名であったため23名の回答を分析対象とした。

各項目の平均値と、標準偏差は表4の通りである。

どの項目も現地演習前に比較して現地演習後の平均値が上昇していた。さらに全項目において、現地演習前と現地演習後の得点の間に、 $p<0.5$ の有意差が認められ、現地演習後の得点が高くなっていた。

3.2.2 実習前後の効果量

効果量(r)については、全ての項目について、 r の値が0.5を超えており、効果量は大であった(表4)。

とくに、項目3。「地域のもつ様々な地域資源(歴史や文化、産業など)について具体的に述べることができる」については $r=0.86$ であり、最も高い効果量を示していた。

3.3 考察

3.3.1 現地演習の成果

全ての項目において現地演習前後の得点に $p<0.5$ の有意差が認められ、平均値が増加していることや、効果量

(r) の値が 0.5 を超え、効果量大であることから、現地演習は非常に高い成果をあげていると指摘できる。

以下、事前事後アンケート結果をもとに、自由記述とインタビューでの言及も押さえながら現地演習の成果を考察していく。

自由記述やインタビューでの言及は「 」で示す。固有名詞は記号化し、「 」内で文脈に沿って研究者が補足している場合は()で示している。なお、インタビューの記述は発言そのままではなく内容や文脈を変えることなく研究者が要約したものである。また現地演習での活動は< >で示す。

3.3.2 最も効果量が高い項目 (項目3)

現地演習前後で最も効果量が高くなっていた項目は、項目3。「地域のもつ様々な地域資源(歴史や文化、産業など)について具体的に述べることができる」であった($r=0.86$)。

これは、社会教育主事として地域活動を企画・推進していくにあたって、地域にある歴史や文化、産業といった資

源やその地域のもつ良さや強みへの理解や気づきが重要になってくるが、そうした知識や地域資源を見る姿勢が、<地域資源の発見と産業、そして人づくり><文化財の有効活用の在り方><地域文化の継承と課題>といった講義や見学、<集客するための工夫の在り方:ジップライン体験>や<水辺の活動:シーカヤック体験>といった、地域の資源を活用した取組を直に体験することによって、実感して身につけていることを示していると考えられる。

自由記述でも、「現地演習で訪れたA市は、歴史と文化を大切に継承している地域であるということを知りました」「B町の海の綺麗さにも感動した」とあり、またインタビューでも、「事前学習をしていたといっても、現地に行くまでは、文章だけが入っていて、情景というものがつかめなかったのですが、地域がどのようなになっているのかを考えたり、地域資源を感じながら歩けたりしたことがとてもよかったですと思っています」と言及があったように、現地演習で実際に現地を訪れることによって、地域のもつ資源の知識や地域資源を見る姿勢が身につけていることを示していると考えられる。

表4 各項目得点の統計量及び効果量

項目	カテゴリ	Mean±SD	対応のある t検定	効果量 (r)
1. 社会教育施設の意義や役割について具体的に述べる ことができる	現地演習前	3.6 ± 0.8	$p=.000$	$r=0.74$
	現地演習後	4.3 ± 0.5		
2. 社会教育主事に求められる役割について具体的に 述べるができる	現地演習前	3.7 ± 0.7	$p=.000$	$r=0.76$
	現地演習後	4.5 ± 0.5		
3. 地域のもつ様々な地域資源(歴史や文化、産業な ど)について具体的に述べるができる	現地演習前	3.1 ± 0.9	$p=.000$	$r=0.86$
	現地演習後	4.3 ± 0.6		
4. 地域のもつ様々な地域課題について具体的な例を 挙げ述べるができる	現地演習前	3.2 ± 1.1	$p=.000$	$r=0.77$
	現地演習後	4.3 ± 0.6		
5. 地域活動に取り組む様々な人々や組織の連携のあ りようについて具体的に述べるができる	現地演習前	3.3 ± 0.9	$p=.000$	$r=0.79$
	現地演習後	4.3 ± 0.5		
6. 様々な地域課題に対する学びを通じた解決に向け た取り組みについて具体的に述べるができる	現地演習前	3.1 ± 0.9	$p=.000$	$r=0.83$
	現地演習後	4.4 ± 0.5		
7. 地域の実態・特性に応じて活動していくことの重 要性について具体的に述べるができる	現地演習前	3.3 ± 1.0	$p=.000$	$r=0.72$
	現地演習後	4.3 ± 0.6		
8. 地域住民の様々な学びや活動を促進する方法につ いて具体的に述べるができる	現地演習前	3.1 ± 0.8	$p=.000$	$r=0.82$
	現地演習後	4.3 ± 0.5		
9. 様々な人々や組織と、連携・協働して活動に取り 組むことができる	現地演習前	3.4 ± 1.0	$p=.000$	$r=0.72$
	現地演習後	4.3 ± 0.7		
10. 地域のもつ様々な課題について当事者意識をもっ て行動することができる	現地演習前	3.7 ± 0.8	$p=.000$	$r=0.60$
	現地演習後	4.3 ± 0.7		
11. 地域活動をしている人々の地域への思いについて 具体的に述べるができる	現地演習前	3.3 ± 0.9	$p=.000$	$r=0.80$
	現地演習後	4.4 ± 0.6		

3.3.3 2番目に効果量が高い項目（項目6）

ついで、効果量が高い項目は、項目6。「様々な地域課題に対する学びを通じた解決に向けた取り組みについて具体的に述べることができる」（ $r=0.83$ ）であった。

受講者は、現地演習で、＜住民によるまちづくり支援＞＜地域おこし協力隊、地域教育プロデューサーとしての地域の拠点づくり＞＜地域発信の防災教育と子ども食堂＞という、様々な地域課題についての学びを通じた解決に向けた取組について講義を受け見学を行なっている。

自由記述でも、「紹介されるような大きな取り組みをしている人でも失敗を繰り返しながら改善して成長している事がわかった」と当事者も試行錯誤し学びながら取り組んでいる姿を目の当たりにしたことが示されている。

インタビューでも、「やっぱりこれは行ってめちゃくちゃよかったなあと思っていることです。お話いただいたそれぞれの方が、いろいろな地域の課題に対していろいろな解決方法でやられていて、成功もしながらある意味で失敗もしながらそれをこう乗り越えていく過程や過渡期である現在を見せてもらえたというのは本当に大きかったです」との言及があった。

この項目は、現地演習の目的として最初に提示される「様々な地域課題に対する「学び」を通じた解決の取組」の理解という事項に即した項目であるが、現地演習を通じて大きな成果となっていることがわかる。

3.3.4 効果量（ r ）が0.80程度の項目（項目5、8、11）

項目5。「地域活動に取り組む様々な人々や組織の連携のありようについて具体的に述べるができる」は $r=0.79$ で効果量大である。

現地演習では、＜多様な主体をつなぎ連携して行う地域づくり＞＜多様な主体が連携して子どもを育てる取組＞＜地域学校協働活動の実際＞といったように、連携のありようの実際を知る機会を提供している。

自由記述では「地域自治体組織を中心とした個々のコミュニティの繋がりそれぞれの働きをどのように繋げているのかという実践（について知れた）」とある。

インタビューでも、「他の活動をされている方の名前が他の公民館で出てきたり知り合い同士だったり、地域の活動は数珠繋ぎというか、それぞれの活動が本当に繋がった現地演習だったので、実際に行ってそれぞれの親密

度もわかるくらいこんな風に連携していることが具体的にわかりました」とあるように連携のありようの実際を受講者は確認できていることがわかる。

項目8。「地域住民の様々な学びや活動を促進する方法について具体的に述べるができる」も効果量が非常に高い項目であった（ $r=0.82$ ）。

＜本を通じたつながりづくり＞という講義と見学、＜人間関係促進（レクリエーション）の技法＞という演習を設けている実習地域もあるが、インタビューで、「活動に参加させていただいている中で、Cさんが声がけとか人の繋ぎ方っていうのを見せてくれて、それがうまく形になっているのを見せてくれたので、今後自分がやっていく方向性というか、繋げ方はこういうふうなことを参考にやっていったらいいんだなと思っています」「人と人や組織とを繋ぐ時に、ハードルを下げて、最初からこう協働したいんですけどっていうのを言っちゃうのではなく、まずはちょっとずつ一歩ずつお互いに近づくっていうやり方があるんだっていう学びがあって、今度真似しようかなと思っています」と言及があるように、具体的方法を実践者から目の当たりにすることで住民の繋がりをつくり活動を促進する方法の理解が深まっていることがわかる。

項目11。「地域活動をしている人々の地域への思いについて具体的に述べるができる」も高い効果量を示している（ $r=0.80$ ）。

自由記述でも「関わった皆さんの熱い思い（を知れた）」「実践されている方の思いを現地で聞かせていただき、社会教育の役割や地域が元気になることの大切さを感じることができた」「各地域で取り組んでこられている方の思いを直接聞いたことが大きかった。特にリフレクションの際にも来ていただきしっかりと時間をとって聞くことができとても有意義なものとなった」とあった。

インタビューでも、「現地演習で一番残っているのが、その人たちが思っている思いで、私のメモにいっぱい書かれています。課題だったり悩みだったり子どもたちのなんか楽しそうな感じだったりお手伝いに来ている人たちの感想だったりっていうのをいっぱい書き留めています。それは本当に事前学習ではわからないし現地に行かないとわからないことだったので、本当に一番、ああこういう思いでやっているんだっていうのを実感できたと思

っています」とあったように、地域の人々の思いへの理解が深まっていることがみてとれる。

3.3.5 効果量 (r) が0.70以上の項目 (項目1、2、4、7、9)

項目1. 「社会教育施設の意義や役割について具体的に述べることができる」についても効果量大であった ($r=0.74$)。

現地演習では、＜生涯学習の拠点としての図書館の役割＞＜多様な主体が連携して子どもを育てる公民館の取組＞＜求められる社会教育施設とは＞＜博物館・記念館・図書館見学＞＜地域づくり活動センターでの活動＞＜青少年教育事業・施設の利活用＞＜公民館での青少年育成活動＞といったように、多くの社会教育施設に訪問し講義・見学を受ける機会を用意している。

現地演習前の講義やグループ別演習での事前学習で社会教育施設についての理解が深まっているためか、アンケートでの現地演習前の平均値が3.6と高めにはなっているが、自由記述で「それぞれの施設が存在理由などについて実際に従事されている方から話を聞くことで事前に調べていた事以上に、深く知ることができた」「各公共施設、私設図書館、神社などにも社会教育に通ずるものがあると学べた。新たな視点で身の回りの物を見ようと思った」とあるように、現地演習を通してより深く、具体的にそれぞれの社会教育施設の役割の理解につながっていることが伺える。

項目2. 「社会教育主事に求められる役割について具体的に述べることができる」も $r=0.76$ で効果量大であった。

インタビューでも、「今回の現地演習で様々な施設や活動に行きましたが、社会教育主事っていうキーパーソンがいなくてこうした地域の活動のつながりはなかなか生まれにくいことを実感できました。社会教育主事の仕事がより充実していけば様々な施設や活動がより活かされるっていうことを気づいたので、その部分で社会教育主事の役割っていうのを実感してどれだけ重要かっていうのがわかったと思っています」「それぞれの施設や活動をつなげるのが社会教育主事の仕事だと思いますが、その仕事が大切であると改めて知ることができたということはものすごく大きいと思います」と言及があったように、現地演習全体にわたって「社会教育主事が果たす役

割を理解する」⁹ことを目指しているが十分に達成できると考えることができるであろう。

項目4. 「地域のもつ様々な地域課題について具体的な例を挙げ述べることができる」も $r=0.77$ で効果量大であった。

項目6とも重なるが、インタビューでも、「私が住んでいる地域とは状況が少し違っていても人口減少だったり、人手不足だったりというのはどこでも共通で課題として出てきていると思いました。そういった中で行政とどう協働しながらいい方向に進めているのかということが具体的に知ることができました」とあったように、現地に赴き話を聴くことで、まちづくり、地域おこし、拠点づくり、防災、子ども食堂といった地域のもつ様々な地域課題をより具体性をもって理解できることにつながっていると考えられる。

項目7. 「地域の実態・特性に応じて活動していくことの重要性について具体的に述べることができる」についても $r=0.72$ で効果量大であった。

インタビューでも、「地域課題は共通するものがあったとしても、A市でされていることがそのまま私の住む地域でできるかどうかはわかりませんし、やっぱり無理なく地域の特性に合わせてやるのが大事なんだなと思います」

「地域資源の話にも繋がるとは思いますが、地域にある資源を活かしながら次世代につなげてシンボルにして人を集めたり資金を集めたりといったように活動を進めていくことが大切だと思っています」と言及があるように地域の実態・特性に応じて活動する必要性が認識されていると考えられる。

項目9. 「様々な人々や組織と、連携・協働して活動に取り組むことができる」についても $r=0.72$ で効果量大であった。この項目は、現地演習での講義や見学を通して向上する力ではあるがそれよりむしろ、受講者が現地演習での受講者同士のかかわりやリフレクションを通して向上する連携や協働の力を想定している。

インタビューでは、「現地演習に行った我々のメンバーも良かったと思うんですよ。教員も公務員も、NPOの方も大学院生もいて。色々な方と関わるのが社会教育の良さだと思います。皆さんのいい視点がとっても勉強になるんですよ。毎日のリフレクションで本当に考えも関係性も深まったと思います。同じ釜の飯を食べて同じ

屋根の下で寝て。だんだんチームワークが芽生えて、これこそ連携だと思いました。前向きな人ばかりで、なんですかね、こうつながる勇氣とか、自分だって誰とでもまあうまく出来そうだなって感じの経験と、自信になるかわからないですけど勢いを持たせてもらったように思います」との言及があった。

これは2泊3日の寝食を共にする合宿研修である現地演習が目的とするところへの言及である。受講者が、「多様な主体と連携・協働を図りながら(中略)取り組むことができる」¹⁰という社会教育主事、社会教育士には必須であると考えられる力が獲得されていることを示している。またそれを可能とする連携へのマインド(「つながる勇氣」「自分にもうまくできそうだなという勢い」)が認識されている。

3.3.6 効果量大であるが最も効果量が低い項目(項目10)

項目10。「地域のもつ様々な課題について当事者意識をもって行動することができる」は、効果量大ではあるが全項目中で最も低い効果量となっている($r=0.60$)。これは、そもそも当事者意識が高いため社会教育主事講習を受講しているという受講者の特性もあるだろう。実際に現地演習前のアンケートでも平均値が3.7となっている。他項目と比べ効果量が低いといえども事前事後の得点に有意差が認められ、平均値が増加し、効果量も大であるため大きな成果を得ていると言える。

インタビューでは、「現地演習の途中から、社会教育主事になれたらこういう感じで、こういうことができるのではないかと考えながら行動していました。自分の地域でも同じ課題があるから地域の人たちの声を聞いた時にじゃあ自分はここでこんな取り組みだったり、こういう人たちをつなげてあげたらいいのかなっていうのを実際に自分の地域でというレベルで落とし込めたり想像できたりってというのは大きかったですね。実践したいなって思いましたね」「本当に当事者意識ってというのは2泊3日で芽生えすぎて、やっぱり現地演習で実際に行って活動されている方々に会わなかったら感じなかったと思いますし、やっぱり電話とかメールとかでのやりとりじゃなくて実際に行ってこの場所の空気感であったり人であったりっていうのを感じなきゃ自分も当事者意識って芽生えないんだなって言うのはすごく感じて、何でもとりあ

えず足運んで一回行ってみようっていうのを結構この現地練習で心に決めたというか、足使ってなんぼやなあっていうのはあらためて思いました」と当事者意識が非常に高まったという言及があった。受講者が「各自の問題意識を深め(中略)、自ら課題の解決に取り組むことができる」¹¹という当事者意識の向上に現地演習は大きく貢献していると捉えることができるだろう。

4. 成果のまとめと今後の展望

以上のように、量的、質的データの検討によって現地演習の成果を明らかにしてきた。

社会教育現地演習の目的をもとに研究者間で検討し作成した量的データである11項目の事前事後アンケート調査の結果は、全項目において、現地演習前後の得点に $p<0.5$ の有意差が認められ、平均値が大きく増加し、効果量(r)の値も全項目0.60以上で効果量大を示していた。このように、社会教育現地演習の目的に対して大きな成果を得られていると考えることができる。

そして、質的データである自由記述及びインタビューからも大きな成果が得られていることが裏付けられたと考えることができるだろう。

社会教育のこれからを担う社会教育人材を養成していく上で、本学が実施したような、現地でのフィールドワーク(講義、演習、見学、聴き取り、参加体験、集団討議、記録、リフレクション等)を含み、大学教員と教育事務所担当者が受講者の学びをファシリテートする現地演習は、非常に効果的な取組であると指摘できる。

自由記述には現地演習全体に対する肯定的な記述があった。「現地演習では、様々な課題を持ついろいろな立場の方々から貴重なお話をいただき初めて知ることばかりでとても学びが深まった」「社会教育に、公的な面と私的な面とでできることに違いがあり、それぞれに思いがあることが実体験として分かりました。行ってみて、話を聞いてみないと分からないことがあることが大変よく分かりました」「事前にネットで調べ学習をして現地へ参りましたが、やはり、現場では細かな所などを知れました。ネットでは分からない事、勘違いしている所などが洗い込まれ、とても学びがありました」「現地訪問することにより、その場の空気感や携わる人の思いをダイレクトに聞くことができ、より内容を深掘りすることができた」「事前の

情報収集だけでは得られなかった場所の空気感や演習先の方との対話で繋がりがもてた事が良かったです」 「現地の文化・歴史・社会教育の実践の場を実際に見て、それらに携わる人たちの声を聞けた事が様々な気づきになった。その地域への愛着や地域への誇りがどのように築かれるのかが分かった気がする」

これらはまさしく現地に赴かなくては得られない気づきと学びである。

今後も「地域全体の学びのオーガナイザー」として必要な資質能力を育成・向上に資することができるよう、講義の目的や内容に即して慎重に検討を重ね、「オンラインとリアルのベストミックス」を目指し、意義ある社会教育主

事講習を開講していきたい。

(なお、本研究はJSPS 科研費 20K02487 の助成を受けたものである。また、本稿は、第 71 回日本社会教育学会研究大会で報告したものをもとに大幅に加筆したものである。)

謝辞

令和 6 年度社会教育主事講習現地演習の企画及び実施に多大なるご協力をいただいた愛媛県教育委員会、東予教育事務所、中予教育事務所、南予教育事務所、各市町教育委員会並びに、各活動での講師・関係者の方々に深く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

註

¹ 社会教育主事・社会教育主事補について. 文部科学省ウェブサイト.

https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/gakugei/syujij/index.htm. 2024 年 9 月 1 日閲覧.

² 中央教育審議会生涯学習分科会教育人材部会 (2024) 社会教育人材の養成及び活躍促進のあり方について (最終まとめ) . p.5-6.

³ 社会教育主事講習・社会教育主事養成課程について. 文部科学省ウェブサイト.

https://www.mext.go.jp/a_menu/01_l/08052911/classes.html. 2024 年 9 月 1 日閲覧.

⁴ 前掲 3. p.11.

⁵ 前掲 3. p.10

⁶ 令和 6 年度社会教育主事講習(全科目講習)実施計画・講義概要. p.16.

⁷ 水本篤, 竹内理 (2008) 研究論文における効果量の報告のために-基礎的概念と注意点-. 英語教育研究. 31. p.57-66.

⁸ 前掲 7

⁹ 前掲 7.

¹⁰ 前掲 7.

¹¹ 前掲 7.